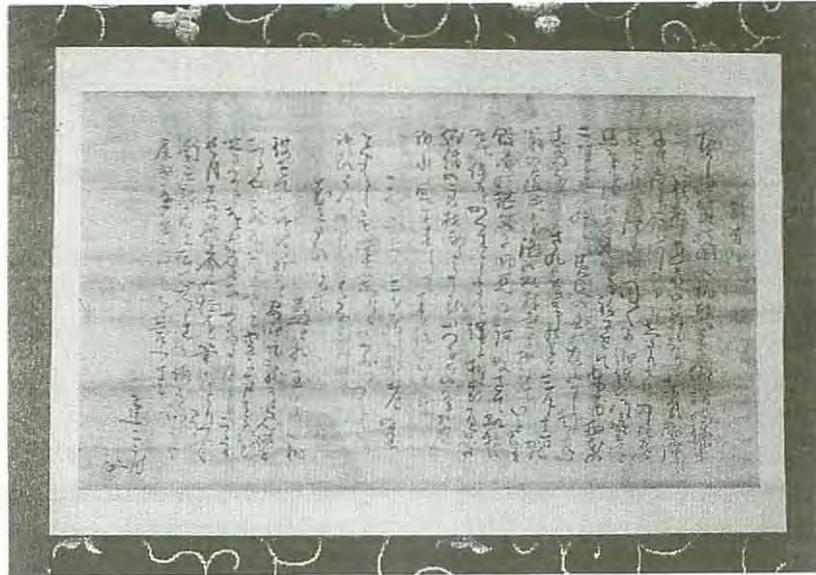


館蔵資料紹介

支考筆『訃音』

母利司朗



訃音

むかし伊賀の国の桃地堂に俳諧の棟梁ありて、樗散に蘆応の翁となりて、東武の深川にて手斧はじめをぞしたりける。中比その巻がねをつたへて国々に俳諧の門をたてて、馬をもつなげせ、犬をもねさせて、東花西花の二坊とよばれしは、美濃の国のなながし獅子庵の支考なりける。されば去年の春三月十二日、かの翁の忌を洛の双林寺におゐていとなみ、仮名の謎文に師恩を謝しぬ。さて此秋はその跡をかくすと間に、誠に申しむべきは俳諧の良材なる事を。いづれの年ならん、我北国に來りて春をむかへて、

龍宮に三日居たれば老の春と聞えしが、その春はしばらくの別にのぞみて我ひとつの箱をはなむけす。

花みたび咲て蓋とれ玉手箱
彼すでにその箱をあけて、龍かと見て龍となるや。龍かと思よやと空に声するを、世にまたその名とはいふなるべし。ここに長月十六日、彼が斧の柄を筆にとりて、見よ見よ、南無龍居士去ていづれの術をか得たると虚空をたたけども答へず。

蓮二房 花押

ここに紹介する資料は、本学附属図書館所属にかかる美濃派(蕉門俳諧の一流)の祖支考の自筆懐紙(寸法縦25・1、横41・4)で、「訃音」と題される一文である。いかにも古色然とした軸物に表装されており、裏書から、おそくとも安田以哉坊(以哉派祖)の頃には現在見るかたちをとっていたらしいことがわかる。昭和11年、まず岐阜県師範学校(現教育学部)の企画収集する「郷土研究資料」の一点として収められたが、戦後、学制改革に伴う管理換によって岐阜大学附属図書館に移された。なお本館蔵の和本古典籍類については、近年、文部省国文学研究資料館の手で調査・撮影が行われ、昭和58年から同館において研究者を対象とした閲覧・写真複製のサービスが行われており、比較的容易に利用することができ

るようになっている。

さて、本資料「訃音」は蓮二房なるものが支考の逝去を告げたかたちをとっているが、これが例の正徳元(1711)年八月十六日の支考伴死に関わるものであることはあきらかであろう。これと同じ内容のものは、正徳元年冬頃には刊行されたと推定される『阿誰話』にも収められている。同書はその支考伴死にたいする追善集として編まれたもので、郷里北野の門人渡辺狂の撰に託して、(1)支考自身の草した長文の「終焉記」(後に『本朝文鑑』所収)、(2)白狂・右範以下北野連衆六吟追善歌仙、(3)万子の追善文と万子・秋口・北枝・八紫の金沢連衆四吟歌仙、(4)他二歌仙、および(5)吾仲の支考追善文および句か

らなっている。そのうちの(3)万子他四吟歌仙の前に置かれる無記名追善文が、本資料と同じ内容なのである。『阿誰話』所収文との間には、漢字・かなの違い、てには等の他ほとんど異同はみられないが、『阿誰話』で、文中「水国に」「死別に」となっていて意味の判別しにくかった箇所が、それぞれ「北国に」「別に」の形であったことがわかり、はじめて正確な文意をつかむことができるようになった。

『阿誰話』を素直に読むかぎり、この一文の執筆者は歌仙の発句作者万子とよみとれる。万子は加賀藩士生駒重信の俳号で、金沢蕉門の重鎮北枝に近い当時支考と親しかった実在の人物である。文中、「我北国に來りて」と支考の來訪を伝える点からも、加賀の万子の文とするにふさわしい。よって、文中の「花三度咲きて蓋とれ玉手箱」の句は、例の『蕉門元禄句集』にも万子の句として載せられているわけであった。ところが本資料では、その作者が万子ではなく蓮二房の名となっているのである。これはどう考えたらよいことであろうか。

この蓮二房とは、支考伴死の直前正徳元年八月十四日付野航・右範宛書簡、あるいは後に述べる『山中三笑』あたりから見え出す、北野門人に託した支考の変名であるが、問題は本資料の執筆年時である。もしこの懐紙がほとんど同文を収める『阿誰話』の刊行以後に書かれたものであるとすれば、万子作の形をとっていた追善文をわざわざ蓮二房名で染筆したことになり不自然である。では、これを逆に『阿誰話』成立に関わる草稿的資料と仮定し、『阿誰話』刊行以前に染筆されたとした場合はどうであろう。

ここで、変名白狂の名で出した支考追善集『阿誰話』におさめられる支考自作「終焉記」の、伴死日付を見てみよう。

今年は宝永辛卯の秋……此日は八月十六日也。

この宝永辛卯は八年にあたる。しかし、宝永八(1711)年は四月二十五日に正徳と改元され、宝永八年の秋はない。とすれば、支考自ら著わしたという「終焉記」は、すくなくとも宝永八年四月二十五日以前にすでに書かれていたものということになるはずである。伴死の発案は少なくともそれ以前でなければなるまい。ここで気にかかるのは、その前年三月、東山双林寺におけるはなばなしい芭蕉翁十七回忌追善を興行した後、九月に越前連衆らと加賀の山中におもむいたおりの歌仙における、

仏の経にはや死ぬとあり 伯兎
十六夜の影はきのふの残念か 作囊

(「濁酒」 伯兎・蓮二房(支考)他五吟歌仙)

という付合である。作囊の句は、前句の「仏……死ぬ」から釈迦入滅の二月十五日、つまり「十六夜の……きの

ふ」を導いたものではあろう。しかし、「十六夜」の語は、連句一卷の中では名月としての八月の「十六夜の月」をこそ意味していたはずであり、とすればそれは、支考の伴死予定(?)の八月十六日をあてこんだものと理解できるのではなからうか。もしこの憶測が成り立つとすれば、支考の伴死計画は、その前年秋の加賀山中におけるくつろいだ談笑の中で思い付かれた一種の座興であった可能性が高いのである。

以下、想像に想像を重ねながら、その伴死計画の進行を連ねてみよう。伴死の発案は、郷里北野の連衆、越前・加賀、京都の吾仲一派の連携のもと具体化され、翌年三月、架空の門人「渡辺狂(=白狂)」が『東山墨直し』に登場し、伴死後の変名が確定する。以後、支考は長文の「終焉記」と二・三の追善文を著し、それを万子および吾仲に示し了解を取り、それぞれの作としてすべてがお膳立てされた上で、万子・北枝・従吾・吾仲らの連句ももたらされ、支考自草の追善文と組み合わせ『阿誰話』として刊行された……。本資料は、刊本『阿誰話』のなかに万子の一文として仮託される以前の「蓮二房」名になる支考自作自演の追善文そのものであった、とみることができるのではなからうか。

考えてみれば、「宝永辛卯の秋…八月十六日」というぼろはご愛嬌だとしても、あの長文の「終焉記」を一目見たもののうち、一体なにほどの者が、それをまともに支考の逝去そのものと受け止めたのであろうか。支考自身、もしこれをもって深刻な意図を勘繰られたりすれば、それこそ迷惑せんばんであったろう。後年、支考の三回忌にあたって編まれた『其日歌仙』に、百阿弥は次のような一文を寄せている。

つらつら三類の像前に坐して往時を思ふに、それ黄山の老人東花坊の亡名は正徳辛卯の秋にして八月既望の影にいざよひけるとかや。其頃は『阿誰話』の沙汰ありて、諸国の風人にその話をぬけよとその時の変化を示す。その後、自ら終焉の記を著して衆人に名残を惜しむも生涯の洒落とはいふなるべし。

『阿誰話』は、厳密には「支考」名の終焉という意味合いでとらえるべきなのであろう。つまりは、門人「蓮二房」「白狂」に身を置きかえるかたちをとった改号披露というべきであり、ただそれが支考一生一代の「洒落」であったところがみそというべきであろうか。本学附属図書館蔵の「訃音」は、正徳元(1711)年八月十六日の支考伴死一件の楽屋裏を垣間見せる貴重な証人なのである。(もり しろく：教育学部助教授)